

主体的な進路選択と社会参加を促す進路学習†

近江 龍静*

秋田大学大学院

内海 淳**

秋田大学教育文化学部

鎌田 裕之*

秋田県教育庁

佐藤 圭吾***

秋田県立比内養護学校

知的障害養護学校の進路指導は転換期にあり、進路学習は進路選択や社会参加の主体性の育成を目指す学習である。本稿は、秋田県内における知的障害養護学校高等部の進路学習の調査と実践からその課題を明らかにすることを目的とした。

進路学習の必要性は高まっているが、進路指導の重点課題とする学校が多く、その指導計画、学習方法等については試行錯誤の段階である。今後は、進路学習の内容、方法についての検討が望まれる。その中でも「将来設計」の学習内容、体験学習の充実、重度生徒の学習内容等の検討が必要である。

キーワード：養護学校、進路学習、進路選択

1 問題と目的

知的障害養護学校の児童生徒数は、2000年～2005年を見ると、約1万人増加している。そのうち高等部が約6千人を占めている(表1)。高等部の在籍者数の割合が全体の5割近くを占めるようになってきており、高等部の整備・拡充が図られている。高等部においては、特に、職業教育・進路指導への期待・評価が高いと言われる¹⁾。

知的障害養護学校の進路指導は、1990年代後半から「転換期」といわれている。これは、自立観の変

化、就労・福祉環境の整備、社会福祉基礎構造改革、産業構造の変化²⁾という動向に象徴される背景によるものである。それまでの作業学習・現場実習などの実習的活動中心の実践、個人の「能力開発と適応」を特質とした「伝統的な進路指導」から、進路学習・個別移行支援計画・ネットワークなどのキーワードに象徴される「主体形成と環境整備」の「新たな進路指導」の実践への転換³⁾が望まれる。教育活動の枠組みとしては、「伝統的な進路指導」は、「現場実習と進路相談」から構成される。一方、「新たな進路指導」では、「進路学習・現場実習(進路体験)・進路相談」から構成され、生徒を進路選択と社会参加の主体に位置付けた実践⁴⁾が展開される。

「進路学習」の到達点は、生徒の進路に関する意識及び認識を育て主体的な進路選択を促すことであり、進路選択に関わる学習内容の計画的な配置と、卒業後の生活に関わる進路情報の提供の2点が重点となる⁵⁾。しかし、実践の様式や用語ばかり普及し、基本的な考え方が十分理解されてこなかったため、

2007年1月26日受理

† Learning to Promote Proactive Choice of Career and Participation in Society

* Ryusei OMI, Graduate School, Akita University Akita.

** Jun UTSUMI, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita.

*** Hiroyuki KAMADA, Prefectural Office of Education in Akita.

**** Keigo SATO, Prefectural Special School, Hinai in Akita.

表1 知的障害養護学校児童生徒数・高等部の割合の推移（各年度5／1現在）

	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年
児童生徒数	53,561人	54,987人	57,078人	58,866人	61,243人	63,382人	65,690人	68,328人
高等部生	25,426人	26,274人	27,274人	28,269人	29,537人	30,721人	32,204人	33,542人
割合	47.5%	47.8%	47.8%	48.0%	48.2%	48.5%	49.0%	49.1%

各年度版「発達障害者白書」、文部科学省「特別支援教育資料」より

伝統的な進路指導観のまま「進路学習」を表面的に取り入れている実践状況が多い³⁾という指摘もある。

本稿では、知的障害養護学校の進路指導の転換期である現在、その実践的特徴である「進路学習」を取り上げ、秋田県内の知的障害養護学校高等部の「進路学習」の現状把握と秋田県立能代養護学校の「進路学習」の実践から、現在の課題を明らかにしていく。

II 秋田県の知的障害養護学校における「進路学習」

1 「進路学習」の実態調査

秋田県内の知的障害養護学校高等部ではどのような「進路学習」が行われているのかを調査し、現状把握を行った。

- 調査対象：秋田県内の知的障害養護学校11校
- 方法・期間：郵送調査法。2006年10月下旬～11月中旬
- 調査内容：進路指導の概要、進路学習の実施・方法・評価
- 回収率：91%（10/11校）
- 回答者：進路指導主事

(1) 調査内容の結果と考察

1) 進路指導の重点課題

進路指導に関して各学校ではどのような課題があるのか、各校3点ずつ回答してもらった（図1）。「進路学習の進め方」、「一般就労先の開拓」が7校と多く、以下「現場実習先の開拓」が4校、「教員間の共通理解」3校であった。「新たな進路指導」の特徴である「進路学習の進め方」を課題としている学校がかなり多い。このように生徒の自己理解、社会認識を学校で育てる「進路学習」が、現在の進路指導の大きな課題として認識されていることが明らかになった。

2) 進路学習の実施

進路学習の教育課程上の位置付けは、どの学校も

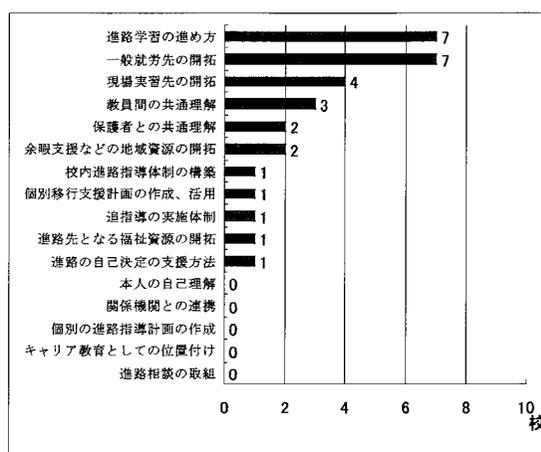


図1 進路指導の重点課題

特設して実施し、生活単元学習が4校、職業が3校、総合的な学習の時間が2校であった。菊池の調査(2001)⁶⁾では、秋田県内で週時程に位置付けているのは20%であったとしている。今回の調査では、すべての学校で特設しているため、進路学習が重要視され、実施されてきたことが読みとれる。なお、全国的な動向を調べた緒方の調査(2002)⁷⁾によれば、特設した授業が週時程にある学校は、42%であり、進路学習の位置付けは、職業30%、総合的な学習の時間26.8%、生活単元学習15%の順となっている。

進路学習の実施学年は、大きな差はなく、2・3年生は10校、1年生は9校であった。高等部には、普通中学校から入学する生徒、養護学校中学部から入学する生徒がいる。その生活経験、学習経験の違いを把握し、3年間の学習をどう組織し、系統性をもたせるかを考えていく必要がある。

進路学習の内容を「職業」「生活」「余暇」「自己理解」「将来設計」「実習」の6領域に分け、その指導状況を調査した（図2）。十分できているを4点、まったくできていないを1点とし、平均を見てみると、職業(2.7)、生活(2.7)、余暇(2.7)、自己理解(2.8)、将来設計(2.1)、実習(3.3)であった。

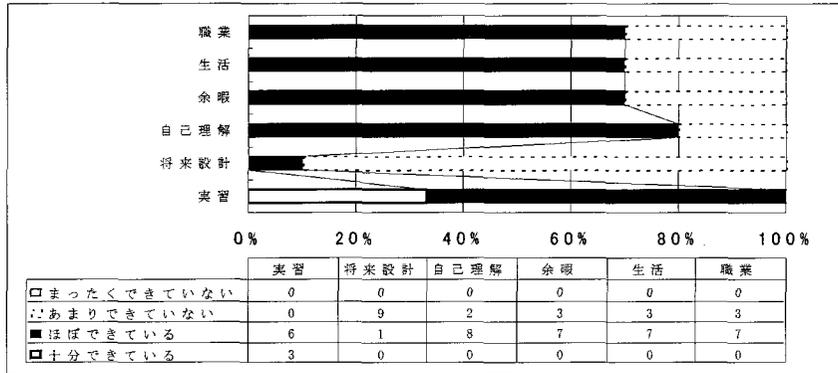


図2 6領域の指導状況

実習の領域は、比較的高く、各学校の充実度が伺える。一方、将来設計については、他の領域と比べて低い。個別移行支援計画の活用を考えると、将来設計に関する学習の充実がもっと意識される必要がある。

3) 進路学習の方法

各学校ではどのような方法で学習を展開しているのか調査した(図3)。「授業担当者の考案したワークシート」(10校)、「私たちの進路〈あしたへのステップ〉」(企画・編集:全国知的障害養護学校長会)(9校)に高い数値が出ている。授業担当者が、生徒の実態に合わせ工夫した取組をしていることが分かる。また、「学校独自のハンドブック等」を作成し、活用している学校も3校ある。それぞれの教師が進路学習について理解し、生徒の実態に合わせた学習を展開するためには、学部としての研修や自己研修が不可欠であろう。その意味でも、ハンドブック等の活用は、進路学習の指針となり教師によって指導の差が出ることを防ぐことが期待できる。

体験的学習の内容(図4)では、「事業所見学」と「福祉施設見学」は10校、「ハローワーク見学」が7校であった。卒業後の進路先に関わる内容のものが多く取り入れられている傾向にあることが明らかになった。知的障害のある生徒は、実際的な生活経験が不足しがちであり、抽象的な内容より、実際的・具体的な内容の指導が効果的である⁸⁾。高等部において現場実習が重要視されていることから、働くことや社会生活を送るために必要なことを体験を通して取り組むことが大切であろう。体験したことを実際の社会生活の中で活用できるように、効果

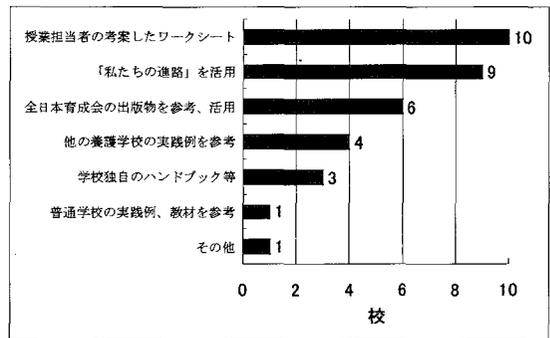


図3 教材、テキスト(複数回答)

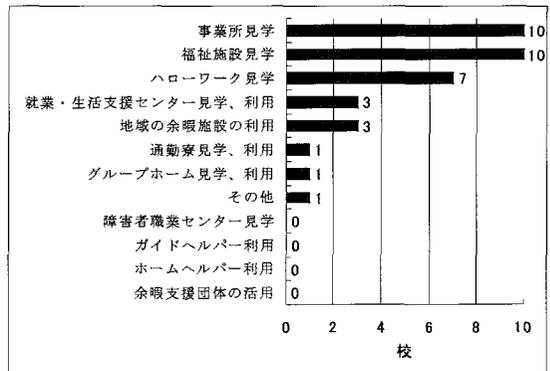


図4 体験的学習の内容(複数回答)

的な体験的学習を考えていく必要がある。将来の社会資源を活用できるようにするためには、「場所を知っている」、「行ったことがある」だけでなく、生徒が主体的に活動できるようになるまでの関係を作り上げていく必要がある⁹⁾。

進路学習の工夫点は(図5)、「生徒に合わせたワー

クシート」が10校であり、ワークシートの工夫が生徒の理解につながるという結果が明らかになった。知的に障害のある生徒に効果的と思われる「視覚教材の活用」と「体験的学習を多く」は、4校と少なかった。また、「保護者との連携」も2校と少ない。

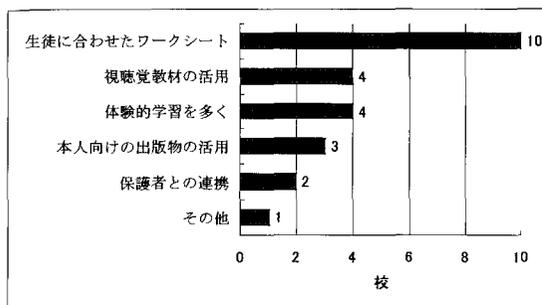


図5 進路学習の工夫点（複数回答）

4) 重度生徒の進路学習

障害が重度の生徒に対する学習の配慮（図6）としては、「体験的な学習を多く」、「指導内容の厳選」が7校、「同じ内容を繰り返し」が6校である。

進路学習の工夫点（図5）と比べてみると、体験的学習は、重度生徒への工夫点として多くの学校が挙げている。これは、重度の生徒の学習内容としてより強く意識されていることを表している。

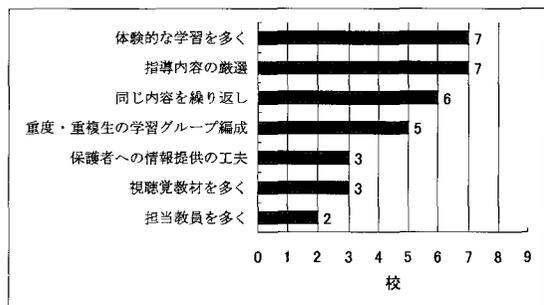


図6 重度生徒への配慮（複数回答）

5) 進路学習の評価

進路学習の効果は（図7）、「進路に対する関心・意欲の高まり」は10校、「現場実習の理解・意欲の高まり」が9校である。これを見ると、進路学習の6領域のうち「職業」、「実習」を中心に効果が現れているといえよう。進路学習を展開する上で必要な「自己理解の深まり」、「進路先の選択」については、

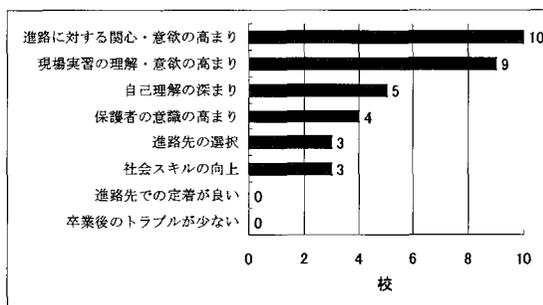


図7 進路学習の効果、生徒の変容（複数回答）

まだ十分な効果が出ていないといえる。

効果的な進路学習が「ほぼできている」とする学校が7校であり、「あまりできていない」とする学校が3校であった。「ほぼできている」学校であっても、図1の進路指導の重点課題と照らし合わせると、そのうち4校が進路学習を課題として挙げている（表2）。効果的な学習はほぼできているが、課題として挙げているということは、改善の余地があることを表しているであろう。

表2 効果的な学習と重点課題の相関

	効果的な学習がほぼできている	効果的な学習があまりできていない
進路学習が課題	4校	3校
その他が課題	3校	0校

進路学習の今後の課題は（図8）、「3年間の系統的な指導計画」と「評価の仕方」が8校、「学習方法の工夫」が7校、「重度・重複生への指導」が6校と高かった。比較的どの項目も課題と挙げている傾向があり、進路学習の取組が多様な観点から課題として認識されていることが分かる。

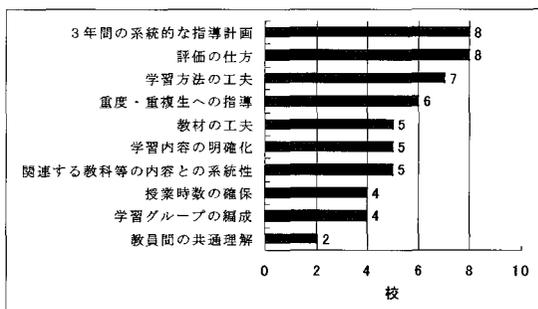


図8 今後の課題（複数回答）

表3 秋田県立能代養護学校高等部 進路学習計画表(平成17年度改訂)

1 年	2 年	3 年
○ 身近な人たちの仕事や生活を知る。 ○ 卒業後の生活に関心をもつ。	○ 様々な仕事や生活を知り、自分の適性を考える。 ○ 卒業後の進路に関心を持ち、具体的に知る。	○ 自分の適性を知り、主体的に進路を選択する。 ○ 卒業後の生活についての知識を高める。
【職業】 ◆仕事調べ、身近な職業 ◆先輩の実習、仕事 ◆社会人の一日	【職業】 ◆働く意義、働くための条件 ◆様々な仕事 ◆職場の付き合い ◆生産、流通、サービス ◆社会人のルール、マナー	【職業】 ◆求人票、履歴書 ◆ハローワークについて ◆働く人の権利と義務 ◆離職時の対応 ◆相談機関、関係機関
【生活】 ◆交通機関	【生活】 ◆お金の管理 ◆いろいろな暮らし ◆選挙	【生活】 ◆サービスの利用 ◆給料と障害基礎年金 ◆療育手帳 ◆危険 ◆困ったときのQ&A
【余暇】 ◆公共施設利用 ◆趣味	【余暇】 ◆余暇の過ごし方	【余暇】 ◆同窓会、青年学級
【自己理解】 ◆自分のおいたち ◆私の得意、苦手	【自己理解】 ◆障害理解 ◆自分の適性	【自己理解】 ◆職業評価と実習先評価
【将来設計】 ◆将来の夢	【将来設計】 ◆夢と現実	【将来設計】 ◆将来のライフプラン ◆結婚

校内・現場実習の事前事後学習

1 年	2 年	3 年
【校内実習】 (6月期, 11月期) ・ 実習の目的 ・ 働く意義 ・ 目標設定 ・ 仕事をするときの態度, マナー ・ 結団式 ・ 報告会 ・ 反省, 礼状書き ※ 現場体験実習を行う場合もある。	【現場実習】 (6月期, 夏季休業中, 11月期, 冬季休業中, 個別, 春季休業中) ・ 実習の目的 ・ 働く意義 ・ 目標設定 ・ 通勤方法, 勤務時間, 持ち物, 実習内容 ・ 仕事をするときの態度, マナー ・ 困ったときの対処方法 ・ 帰着電話 ・ 事前あいさつ, 見学 ・ 結団式 ・ 報告会 ・ 反省, 礼状書き ・ 実習先からの評価	

表4 進路学習ハンドブック 指導内容例：【余暇】

3年【余暇】

題材名	楽しむ生活～同窓会，青年学級～
ねらい	卒業後の余暇について考え，同窓会や青年学級にも積極的に参加しようという気持ちをもつことができる。
学習活動	○指導のポイント ・ 支援上の留意点
1 現在の「楽しみ」は何か発表する。	○一人でする趣味や友達とする余暇など様々な楽しみを引き出す。
2 社会人になったら，どんなことをしたいか考える。	○学生の時とは違う生活になることを踏まえ，余暇の重要性を伝える。
3 友達について考える。	○小学校，中学校のころの友達について，現在のつき合いはどうしているかも出し合うようにする。 ○社会人になると職場の人とのかかわりが強くなってくると思われるが，これまで一緒に勉強してきた同級生とのつき合いも大事であることを伝える。
4 同窓会について知る。	・同窓生の一員であることを自覚できるように，「秋田県立能代養護学校同窓会会則」を用い説明をする。
◆同窓会総会・囲む会	○年に一回，4月下旬～5月上旬に学校で行われる。内容は，同窓会行事の計画，近況報告，レクリエーションなどである。
◆成人を祝う会	○8月の上旬の日曜日に行われる。成人者を祝うために，同窓生，保護者，旧担任などが集まる。会食，記念品贈呈，余興などが行われる。 ・積極的な参加しようという気持ちを高めるよう，同窓会ではどのようなことをしたいか尋ねる。
5 青年学級について知る。	
◆月一回のレクリエーション	○例：カラオケ，温泉，日帰り旅行，山登り，調理 ・積極的な参加しようという気持ちを高めるよう，同窓会ではどのようなことをしたいか尋ねる。
6 同窓会活動や青年学級の希望内容を発表し合う。	・それぞれから出されたものについて，可能性を一緒に考えたり，可能にする方法をアドバイスしたりする。 ○同級会でやりたいことも出し合えればなお良い。同級会幹事を決めて，リーダーシップを期待するという方法もある。
7 その他の活動について知る。	○地域の行事への参加やボランティアなどの休日の過ごし方も必要であることを伝える。

〈参考資料，教材〉

- ①「私たちの進路〈あしたへのステップ〉」(企画・編集：全国知的障害養護学校校長会)
P101～104：人とのつきあい P105～108：余暇の過ごし方
- ②「ひとりだち」(全日本手をつなぐ育成会)
P54～59：自分の時間をもとう！ P60～63：人とのつきあい
P64～67：人を好きになること P72～73：地域の活動やボランティア活動
- ③秋田県立能代養護学校同窓会会則
- ④ワークシート

2 能代養護学校の「進路学習」の実践

ここでは、平成16、17年度の2か年で「進路学習」を題材とした研究の報告¹⁰⁾をし、実践から出た課題を明らかにする。

(1) テーマ設定の理由

1) 学習コース制

能代養護学校高等部では、平成15年度から学習コース制を実施している。「職業学習コース」、「生活学習コース」の2コースを設け、生徒の実態やニーズ、進路希望等に応じた教育課程を編成している。目指すところは、就労や豊かな卒業後の生活に必要な知識や技能、態度の習得を図り、主体的な社会参加ができる生徒を育成することである。

2) 進路指導の動向

養護学校の進路指導は、進路学習・個別移行支援計画・ネットワークに象徴される主体形成と環境整備の実践への展開が図られている。特に、進路学習については、自立観・障害観の変化、産業構造の変化、障害福祉システムの変化等の背景を考慮した工夫が必要であり、授業改善の視点からも取り上げて見直しをしていく必要がある部分である。

上記のような背景があり、能代養護学校高等部では、「主体的な社会参加と豊かな生活を支援する授業の探求」をテーマとし、主体性の育成を目指す進路学習を題材とした研究を平成16、17年度の2か年計画で設定した。進路学習の充実を図ることがテーマに迫る内容であると考えた。

(2) 研究の経過と成果

研究一年次は、主に進路学習についての基礎研究・資料収集、授業研究、そして「進路学習ハンドブック」の作成等を行った。「進路学習ハンドブック」は、全国の先行事例研究を参考に作成された進路学習を展開するうえでの資料となるものであり、職業学習コースの進路学習での活用を想定して作られた。内容は、計画表(表3)と指導内容例(表4)が記載されている。研究のテーマとして進路学習を取り上げる以前は、年間計画の立案時から個々の教師の判断に任されている状態であった。しかし、「進路学習ハンドブック」を活用することにより、指導内容に3年間の系統性、一貫性をもたせることで、教師によって指導内容の差が出ないといった効果が期

待される。一年次の成果としては、①進路学習に対する教師の知識の蓄積ができたこと、②授業研究会をとおし授業実践が蓄積されたこと等、③学部研究で取り上げたことで、それぞれの教師が進路学習についての意識が向上したことが挙げられる。

研究二年次は、「進路学習ハンドブック」を活用した授業実践を行い、「指導内容」と「指導方法」の妥当性を検討することに加え、「系統性のある学習」の確立を目指すための協議をした。部内授業研究会の題材と協議題について、表5に示した。

表5 部内授業研究会の題材と協議題

月	学年・コース	題 材	協 議 題
7	3・職業	卒業後の生活～「給料と年金」	卒業後の生活を意識したり、働く意欲をもったりすることができるための支援について
7	3・生活	卒業後の生活～掃除の仕方を覚えよう～	重度重複障害の生徒の進路指導の在り方について
9	1・職業	私の得意なところ、苦手なところ	※ワーキンググループによる授業検討 ※全校授業研究会 ※指導助言・外部講師
10	2・生活	先輩達の進路先を知ろう	学習効果を高める体験学習の設定について
12	1・生活	校内実習を振り返ろう	進路学習に見通しや興味をもつ手だて
1	2・職業	お金の管理	※自主公開研究会 ※指導助言・外部講師

進路学習の授業改善を行う中で、「進路指導ハンドブック」の不足している部分が明らかになり、「指導のポイント」「支援上の留意点」を加筆するようにしていった(表4)。それと同時に、学習指導案(略案)と学習で使用したワークシートをまとめることとした。重度重複障害生徒の進路学習においては、実態に応じて学習内容を精選したり、必要な要素を総合的に取り上げたりして「進路学習ハンドブック」を活用した。授業研究会で共通して確認できたことは、経験を通した学習を繰り返す行いが重度重複障害の生徒の進路学習として有効であることである。

二年間の研究を総合的に見て、成果として4点挙げられる。その1は、「円滑な学習計画の立案」で

ある。年間学習計画の立案時から「進路学習ハンドブック」内の「進路学習計画表」を活用することで、学習計画を円滑に立案することができた。その2は、「職員の意識向上」である。「進路学習ハンドブック」に記載されている学習内容と学習集団の実態と照らし合わせることで、学習内容を客観的にとらえ、適切な指導につなげることができた。また、学習の中に生徒が自己選択したり、自己決定したりする場面を意図的に設定するなど、職員の進路学習に対する意識が向上した。その3は、「授業の客観的評価」である。各学年のすべての学習コースで授業研究会を実施した。また、ワーキンググループによる授業検討ほか、授業研究会に外部講師を招へいた。指導は、「進路学習ハンドブック」を基にするが、授業や生徒個々のねらいが、発達段階や生活経験を踏まえた上で、現在の生活に即していること、そして、それを達成できる学習活動の設定が必要であることを確認することができた。学習集団や生徒一人一人に応じた系統性のある進路学習の基盤が築かれつつある。その4は、「授業改善を進路学習ハンドブックへ反映」である。「進路学習ハンドブック」を活用した実際の指導は、授業研究会をとおり、生徒の日常生活を反映したものや、現場・校内実習に反映できるものなど、より実地的なものになっていった。

(3) 今後の課題

二年間の取り組みの中で出された課題として二点挙げられる。一点目は、「進路学習ハンドブックの活用の仕方」である。「進路学習ハンドブック」を活用しつつも、学習集団や生徒一人一人の実態に応じた学習の設定を行っていく必要がある。卒業後の生活を見据え、生徒の変容を細かくとらえることで学習活動に幅をもたせ、授業をさらに充実させていく指導力を、授業研究会などをとおして向上できるようにする。二点目は、「実際の力になる進路学習を目指す」ことである。豊かな社会生活を支えるという視点からも、学習で理解した知識を活用できる校外学習の実施など、実践の充実を図る必要がある。また、余暇の過ごし方・現場実習における家庭との連携、学校生活・家庭生活と進路学習との関連を図るなど、進路学習で学んだことが実際の力となるようにしていかななくてはならない。特に、重度重複障害の生徒にとっては、校外学習など、体験をとおした学習が有効であることを授業研究会で確認し、実

践した。体験をとおした学習の中に進路学習のどの要素を盛り込むか試行錯誤の中での取り組みであった。今後、このことについて協議を重ねることで重度重複障害の生徒の進路学習の在り方が見えてくることと考える。

III 考察

秋田県内のすべての知的障害養護学校高等部で週時程に特設された進路学習が行われている。2001年の調査では、2割の学校でしか取り組んでいないことから見て、進路学習の必要性が高まっているのは確かである。必要性の高まりは、学習の在り方の模索につながり、7割の学校で進路指導の重点課題に挙げている。教育現場では、進路学習の必要性はあるが、その指導計画、学習方法、教材の工夫等、様々な点で試行錯誤の中での実践だということが明らかになった。ここでは、進路学習の内容と方法、重度生徒の進路学習について考察する。

1 進路学習の内容

学習内容は、「職業」「生活」「余暇」「自己理解」「将来設計」「実習」の6領域について各校で指導内容を吟味し実践されている。どの領域も主体的な進路選択と社会参加のために重要であり、バランスの取れた指導が必要である。指導状況を見ると、「実習」の領域の充実度が高く、「将来設計」の領域が低い評価である。各領域の情報提供の観点で全国調査した緒方⁹⁾の結果(2003年)では、「自己理解」「将来設計」についての評価が低いと出ている。「自己理解」に関する学習が効果を上げてきている一方で、「将来設計」に関してはまだ十分とは言えない状況である。現在、高等部卒業後の「学校から社会へ」「子どもから大人へ」という移行を支え、生徒のニーズをもとにした支援の在り方と支援者の役割分担を明確化する個別移行支援計画¹⁰⁾を各校で策定している。この策定に関しては、生徒個人の人々の主体的な関わりが要求されることから、特に進路学習の領域の中で、「自己理解」「将来設計」に関する内容が重要である⁹⁾。その意味では、現段階で「将来設計」の領域の効果的な指導が課題であろう。将来のライフプランを考えることができるような学習を検討していく必要がある。

学習内容を設定する場合、6領域の学習内容を精選し、生徒や社会情勢、地域の実情に合わせたもの

にしていく必要がある。また、学習グループとの関係で、全体を対象にする内容、個別の対応によって行う内容など学習内容によって効果的なものになるようにしていくことが望まれる。

2 進路学習の方法

学習を展開するにあたっては、知的障害の特性にあった教育的対応が望まれる。その一つは、生徒の生活に結びついた実地的で具体的な活動を实际的な状況下で指導する¹³⁾ことである。実際の力になる進路学習は、机上での学習のみでは難しい。したがって、進路学習における体験的学習の充実を図ることが大切である。体験的学習の内容は、進路先の可能性のあるところの見学等だけではなく、将来の生活圏域を考慮したものであることが望まれる。そして、体験後の学習では、体験を整理・発展（再構成）させる方法の工夫（比較するなど）により、体験の確実かつ多面的な理解・認識を培う¹⁴⁾必要がある。

教材やテキストの効果的な活用は、生徒の学習内容の理解につながる。調査結果から、学習は、ワークシートの活用が中心であると予想されるが、どのようなワークシートを使用するかで理解度が違ってくる。一人で記入・学習できるもの、興味・関心を引くもの、理解を助ける図や絵が入ったもの⁵⁾などの工夫が必要である。また、ワークシートには、学習の振り返りとして、まとめ、分かったことなどを記入する欄を設け、生徒の理解度を確認し、次の学習への参考とすることが必要であろう。

能代養護学校の実践から出された課題に、「進路学習ハンドブックの活用」がある。ハンドブックは、作成して終わりではなく、そこからがスタートである。職員が学部研究に進路学習を取り上げることで共通理解ができたという成果があるが、あとはどう活用していくかである。あくまで学習の展開例であるので、生徒や学習グループの実態を考え、工夫して活用していくことが望まれる。ハンドブックの活用で、教師の人事異動に左右されることなく、一定のレベルの学習が展開できる。担当任せではない、学校としての進路学習の展開の検討が大事であり、学校独自のハンドブック作りは良い方策である。

学習内容を検討するうえで大切なことは、6領域の内容の精選の他に、自己選択、自己決定の内容をもつ学習の検討であろう。これは、主体的な活動を在学中から意識して行うことで、将来の主体性の発

揮につながると考えられるからである。主体性、自主性を培うためには、授業が魅力あるものなのか、成就観を味わい、自己実現を果たしているのか、青年としての誇りやプライドをもっているのかという観点をもった学習の展開¹²⁾が望まれる。

また、進路学習を行うにあたっては、保護者との連携が欠かせない。将来の社会生活を考えると、一番身近な支援者であり、子どもが頼るのが親であろう。進路学習の内容を保護者と共有し、主体的な社会生活、社会自立に必要なことを一緒に学習していきたいものである。自己決定に基づく自立を促すためには、家族に対しても自立生活に関する情報提供を行い、子どもに備わる力や可能性を再評価する過程を通して、「自立」の意味について理解を深めていくような機会が必要である¹⁵⁾。進路学習では、生徒とともに、保護者の力も高めていく必要がある。

3 重度生徒の進路学習

重度生徒の進路学習の在り方は、長きに渡っての課題である。「障害が重度の生徒の認識に見合う情報内容や提供の工夫は、大きな課題となる」と指摘した中西の研究¹⁶⁾、「重度の障害がある生徒の進路学習の実践では、その課題設定や情報提供の支援方法を模索している段階である」と指摘した緒方の研究⁷⁾があり、その在り方についてこれからも研究していく必要がある。進路学習のみならず、重度生徒の指導については課題としていっているところが多いと思われる。他の学習である領域・教科を合わせた指導等の展開を参考にすることも必要であろう。能代養護学校の実践では、重度生徒にとっては、校外学習など、体験をととした学習が有効であることを確認できた。調査結果からも、体験的学習を配慮点として挙げている学校が多く、重要視している傾向にある。地域の公共施設の利用、飲食店の利用など将来の地域生活をイメージした内容が大切であろう。その他どのような体験学習を設定するかについてはまだ検討の必要がある。重度生徒の主体性は、体験的な学習を繰り返し、見通しをもつことで育っていく。自己決定の部分は、重度生徒であっても大事にしていく必要がある。それは、「～を決めた」という目に見える決定だけでなく、意思や感情の読みとりも自己決定の実現¹⁷⁾であり、教師側の力量が試されるのである。重度重複障害児の指導技術が知的障害養護学校教員に必要な研修¹⁸⁾とされているため、研修

をとおり、この分野の専門性を高めることが望まれる。

〈注・文献〉

- 1) 石塚謙二 (2005) 「これからの高等部教育」 IEP JAPAN Vol.17 IEP ジャパン
- 2) 原智彦・内海淳・緒方直彦 (2002) 「転換期の進路指導と肯定的な自己理解の支援」 発達障害研究 第24巻 第3号
- 3) 内海 淳 (2004) 「養護学校進路指導の新たな展開」 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 第26号
- 4) 内海 淳 (2004) 「新たな進路指導・『移行支援』への転換」 (松矢勝宏監修「主体性を支える個別の移行支援」) 大揚社
- 5) 原智彦・緒方直彦 (2004) 「主体的な進路選択ー進路学習の実践」 (松矢勝宏監修「主体性を支える個別の移行支援」) 大揚社
- 6) 菊池直人 (2001) 「知的障害養護学校における進路指導に関する調査ー秋田県の内の実践と課題ー」 秋田大学特殊教育特別専攻科研究論文
- 7) 緒方直彦 (2003) 「知的障害生徒の個別移行支援計画に関する一考察ー進路学習の課題を踏まえてー」 東京学芸大学大学院修士論文
- 8) 盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領 (平成11年3月) 解説ー各教科、道徳、特別活動編
- 9) 松尾真砂美 (2005) 『『特別なニーズに応じた支援』という視点から考える養護学校のキャリア教育研究』 神奈川県立総合教育センター長期研修研究報告
- 10) 秋田県立能代養護学校 (2006) 「主体的な活動を支援する授業の探求 (2年次) ~支援の最適化と一貫した支援を目指した授業改善の取組をとおして~」 紀要しらかみ第12号
- 11) 「個別移行支援計画 Q & A 基礎編」 東京都知的障害養護学校就業促進研究協議会 [編] 2003年 ジアース教育新社
- 12) 川村泰夫 (2001) 「青年期にある生徒の自主性・主体性を考えるー本人参加と自己決定の視点からー」 発達の遅れと教育 No.536 日本文化科学社
- 13) 「就学の手引き」 (平成14年6月 文部科学省特別支援教育課)
- 14) 内海 淳 (2004) 「生涯学習基盤としての進路学習」 (松矢勝宏監修「大学で学ぶ知的障害者大

学公開講座の試み」) 大揚社

- 15) 渡辺颯一郎 (2006) 「新しい『自立』概念の理解と家族に対する教育プログラムの必要性」 (「障害児の自立を見すえた家族支援ー家庭生活支援を中心にー」) 中央法規出版
- 16) 中西 郁 (1999) 「養護学校高等部における進路指導に関する一考察ー『進路学習』における情報提供支援を中心にー」 東京学芸大学大学院修士論文
- 17) 尾添和子 (2002) 「自己決定の実現」 (全日本手をつなぐ育成会「手をつなぐ No.558」)
- 18) 全国特殊学校長会 (2001) 研究集録「新学習指導要領に基づく教育を充実する専門性の確保と人事の在り方ー養護学校の新たな役割を果たすためにー」

Summary

Career guidance at special schools for the mentally disabled is in a transitional phase. Learning to make career choices is aimed at building willingness to make choices and to participate in society. This paper is a study into career learning at the high school department of a special school for the mentally disabled in Akita Prefecture and into identifying the issues that require attention in practice.

Although the need for such learning is growing, there are many schools that regard career guidance as a major issue and are in the trial-and-error phase in terms of guidance planning, learning method, etc. Further study is necessary for improvement in study content and method for the learning for career program. Especially important is study into learning for "future planning," improvement in field learning and study content for students with severe disabilities.

Key Words : Special school, Learning for Career, Choice of a Career

(Received January 26, 2007)